

## メキシコのポポカトプテル火山切手

P. Q



ポポカトプテルは北緯20° メキシコシティのすぐ西にある火山。アステク語で「煙を吐いている山」を意味している。最高峰は5,452m 熱帯にありながら頂上には雪をいただく火山である。

南からみるとポポカトプテルは熱帯地方に4,200mの比高でそびえる完全な形の円錐形を示す成層火山であるが北側からみると その下に標高3,800mの古い火山体ネクスパヤントラを覆っていることが分る。これは中新世(?)—鮮新世の火山体でありポポカトプテルの高さは基盤から1,600mとなる。古い山体の部分は 丁度山全体の北西部にあたるが 侵食されて巨大なくぼみを作っている。山頂には600×400mの楕円形の火口があり その底の深さは500mで 壁はほとんど垂直である。岩質は輝石安山岩に属し そのSiO<sub>2</sub>は58—63%の範囲に属する。

ポポカトプテルの火山活動はアステクの記録によると1347年と1354年にあったと言われるが 確実なのはスペイン人の侵入者の記録から始る。彼等がメキシコに侵入した1519年には 丁度ポポカトプテルは火を噴いている最中だった。16世紀は噴火が多く 次の1530 39 42 48 71 92年と続く。17世紀は3回 18—19世紀は各1回 20世紀は1920年から27年まで噴気活動が続いた。活動はいずれも中央火口で起ったものである。

ポポカトプテルはメキシコを征服したエルナン・コルテスと深く結びついている。彼が約600人の兵士と18頭の馬 数門の大砲とでメキシコに上陸したのは1518年の11月だった。1519年にポポカトプテルの傍を通った時に その山は火を噴いていた。ポポカトプテルと並んでいる円錐形の山はイクスタチハトルであるが コルテスの一軍はこの二つの山の間から姿を現わして 当時の首都テノチティランに進軍した。そこに巨大な都市を築いていた原住民は馬を見たことがなかったので先ずそれに仰天し 次いで大砲と銃の威力の前にあえなく征服されてしまった。ポポカトプテルについては原住民たちは恐怖と尊敬の念からこの山を眺め 決して登ろうとしなかった。数多くの伝説があり ある話は死霊が住む所であり 他的话では神の住む所だった。コルテスがこの山に近づいた時折から山は火を噴いていたし 原住民が決して山に登らないのを知った。そこでスペイン人が原住民に優れていることを示

すために 3人の部下に山に登ることを命じた。数人の原住民が途中まで連れて行かれたが 山腹のある所で決してそれより登ろうとしなかった。そこは伝説が神々の住家の入口としている所だった。恐怖の原住民達を置いて3人はさらに高く登りはじめたが やはり山頂につかない中に引返した。頂上は雪と氷で覆われ さらに灰や硫黄の匂いのする煙が立ち込めていたからである。彼等の持ち帰った雪と氷を見てコルテスは驚いた。赤道近くでも高い所では氷点以下になることをそれまで知らなかった。

メキシコを征服したコルテスはその成功を上役からねたまれて 救援物資の供給を拒まれてしまった。特に困ったのは銃砲と火薬である。コルテスは極めて創意に富む男だった。銅と錫の鉱山を見つけ出し これから30門の青銅の大砲を作り上げた。鉄だけは彼も及ばなかった。次は火薬である。木炭の作り方はコルテスも部下の1人も良く知っていたのでこれは大量に用意することが出来た。硝石は暖い国々では天然に産出する。それは土の表面に薄い層を作るか土の上層に混って存在する。硝石の混った土を水に入れて 硝石を溶かし出し 結晶を作ることが出来る。

最後の硫黄について コルテスは彼の部下がポポカトプテルで硫黄の匂いのする煙に出合った話を思い出し フランシスコ・モンタナを隊長に選び 部下4人と共に硫黄採取に向わせた。1521年には火山活動は止っていたので 彼等は困難な登山のあと頂上に達し火口の縁についた。垂直の火口の壁の底から硫黄の蒸気が吹き上げていた。火口の周りには期待に反して硫黄昇華物はなかった。火口の中に降りるのはかごの中に乗って行かねばならない。彼等は相談し 下る人間をくじで決めた所 隊長が当たってしまった。かごが130m下りた所でモンタナは手早く壁から硫黄をかき落し 前後7回火口に下って150kgの硫黄を採取した。コルテスは国王に対する報告の中で 妨害した上役を皮肉って「それは全体としてみれば役火薬をスペインから輸入するほどやっかいなことではないでしょう」と書いた。

1930年代にポポカトプテルとイクスタチハトルが並んだ多くの航空切手が発行された。その中の2種。